株式会社　藍　　産地レポート

こんな時期はずれに桃太郎ぶどう生産者を訪ねました

～岡山県瀬戸地区

数年ぶりの大雪に見舞われた岡山県南部。その雪も融け切らぬ1月23日、桃太郎ぶどう誕生の地、瀬戸地区に農園視察に行ってまいりました。

瀬戸地区。平成の大合併以前は瀬戸町だったこの地は、四方山に囲まれいわゆる盆地で、朝晩の寒暖差の大きい土地。また、市街地から離れているため空気も水は抜群。そんな自然豊かな土地で、桃太郎ぶどうの栽培に情熱を燃やす、万代敏正氏を訪ねた。

この辺り
瀬戸地区

剪定後の枝
何に使うかは
また、後ほど

現在のハウス内の状況は昨年末に行った剪定後ということもあり、整然とした感じのハウス内部。もう間もなく、ボイラーに火を入れ、いよいよ今年も始まりといったところだが、近年の燃料費高騰のため開始を遅らせる生産者も多いとか。万代氏は例年通り1月4週に火入れをするとのこと。

羽毛布団の
様な感触

ハウス内。黒く見えるのが堆肥で、ハウス内はいわゆる『土』の匂いが満ちていた。この堆肥はしっかり盛られてはいるものの、感触はふわっとしていて柔らかく施されている。
また、ハウス内は整然とされており、隅々まで手入れが出来ている。このような大規模のハウスでここまでの手入れは非常に難しく、他生産者はなかなかそうはいかないらしい。

結局、地力が全て。そう断言するのは、万代氏。この土作りにかなりのこだわりがあり、普通の生産者は牛糞がメインの土作りをする。万代氏は違う。自然由来のものを自然のスピードに合わせ土を作る。先に出てきた剪定後の枝、落葉、知り合いの豆腐屋さんからもらう大豆の搾りかす。これらを一定期間で攪拌し続けその年月何と3年！！。3年掛けて自然に帰したものがまた新たな生命の由来になる。じゃ、なぜ、牛糞ではだめなのかということになる。「最近の牛は早く大きくして早く売られていく。その為にはやはり、心許無い畜産農家がいた場合成長ホルモンの有無を考えまいといけない」とのこと。また、「牛の味を出すために塩を舐めさせる。その塩も樹には良くない」その位の気を使い、労を惜しまなければいい実にならない。と力説されます。また、万代氏は北欧の海藻を堆肥に混ぜるという『アルギット農法』を産地に導入した方で、自然のものは自然に作るのが一番。という単純かつムズカシイことが繰り広げられているのであった。

桃太郎ぶどう生産者　　万代　敏正氏